

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

地域的アイデンティティの象徴としての先住民アート：
北西海岸先住民サーニッチの教育自治と先住民アート

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-05-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渥美, 一弥 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00006013

地域的アイデンティティの象徴としての先住民アート ——北西海岸先住民サーニッチの教育自治と先住民アート——

渥美 一弥
自治医科大学

1 はじめに

本稿ではカナダ西岸に居住する北西海岸先住民サーニッチ (Saanich) の教育自治と先住民アートの現在について報告する。カナダ先住民に対する同化教育についてはさまざまな議論がなされているが、本報告は同化教育のプロセスとその中で守り続けられたサーニッチの言語とアートについて取り上げ、現在のユーロカナディアン (ヨーロッパ系カナダ人) 社会における先住民アートの位置づけについて具体的な事例を挙げる。

まず第2節で、筆者の2008年発表の報告 (渥美 2008b) に基づき、ブリティッシュ・コロンビア州の同化教育について歴史的に概観し、サーニッチの民族誌的「情報」が置かれていた状況について記述する¹⁾。第3節では、同化教育の中で守り続けられてきたサーニッチの民族誌的「情報」(特に「言語 (センチョッセン)」と「アート (コースト・セイリッシュ・アート)」) とサーニッチの教育自治の現状を述べ、特に「伝統的アート」が熱心に教えられている状況を紹介する。さらに、以上を踏まえて、第4節では、2011年に行った筆者の調査に基づき、先住民アートがサーニッチ近隣のユーロカナディアン・コミュニティにとって持つ意味とは何か検討する。

2 ブリティッシュ・コロンビア州における「同化教育」

カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州 (以下、BC州) では、1970年代以降、先住民運動が本格的になる。土地権に加え、この運動の最大の目的は教育自治の獲得である。それまで、カナダ先住民にとって、「学校」とは自らの地域集団の「誇り」が収奪される場所であり、子供たちから地域集団のアイデンティティを奪う装置でもあった。その装置とは先住民のユーロカナディアン化を目的とした同化教育における学校に備えつけられていた抑圧のシステムを意味する。

BC州における先住民の同化教育は、州政府が先住民の指定居留地に宣教師たちを送り込んだ1870年代に始まる。1880年代まではBC州全域で、宣教師の住居の一部を教室として、先住民の子供たちに同化教育が行われた。宣教師たちが意図していたのは、先住民の子供たちに英語を強制的に使用させ、一人前のキリスト教徒に仕立てることであった。言い換えれば、先住民が祖先から受け継いだ生活様式の排除と西洋化の推進であ

った。

1880年代から子供たちを親元から引き離して教育する寄宿制度の学校が建設され始める。この学校は、インディアン寄宿学校 (Indian Residential School) と呼ばれた。

1920年にインディアン法が修正され、1930年代から先住民の子供たちへの強制的「白人化」教育は、宣教師から政府の手に委ねられていく。当時の先住民人口の激減は、ヨーロッパ人との接触が原因とされている疾病に源があった。その対策として、インディアン局は先住民の各指定居留地に一人ずつ看護師を派遣していた。教師としての資質や適格性とは無関係に、その時に雇用された看護師の夫が自動的に同化教育のインディアン学校における教師として採用された。また、この頃から、それまで親元から通学可能なインディアン学校と親元から引き離されるインディアン寄宿学校との並存から、軸足が後者にシフトされていく。

1940年代になると、州内のあちこちに同化教育の徹底を目的とするインディアン寄宿学校が次々と建設された。学校に強制収容された1年生から8年生までの子供たちは寄宿舎での生活を送ることになる。9年生になると、女子はユーロカナディアンの家庭に、男子はユーロカナディアンの経営する工場などに雇われ、重労働を強いられた。大多数の先住民の子供たちは、学校を「教育の場」ではなく「職業訓練所」と捉えていたという。

寄宿舎では、子供たちには、豆だけのスープなど粗末な食事しか与えられなかったという。サーニッチの長老たちの話では、「インディアン寄宿学校」で「民族の言葉」で話をすると教師から石鹸で口を洗われた者やムチで叩かれ罵られた者がいたという。そして、ユーロカナディアンの教師たちから「落ちこぼれ」の烙印を押され、教師による「いじめ」の対象となった。そのような子供たちの中には寄宿舎を脱走し、生まれ故郷の指定居留地に逃げ帰った者もいたという。

インディアン寄宿学校での寮生活を送るうちに、子供たちの中に新たな序列が生まれた。それは新たな価値観を子供たちの心の中に育てていくこととなった。北西海岸先住民社会は元来階層社会であったが、首長の子供であるとか、平民の子供であるという意識は次第に薄れ、喧嘩の強い者がリーダーとなった。その中で最も尊敬されたのは、腕力があり、教員たちの指示に対して無言で抵抗する者であったという。以上のようなインディアン寄宿学校の記憶を作家であり先住民運動のリーダーであるジョージ・マヌエル (George Manuel) は次のように語っている。「三つのことが私に学校時代をよみがえらせる。それらは、空腹と英語の強制使用と祖父のことで野蛮人と呼ばれたことだ (Manuel and Posluns 1974: 63)」。

カナダ先住民が参政権を得たのは、1960年代である。しかし、それ以降の10年間、同化教育は相変わらず続いていた。先住民とインディアン局との間で、教育改善に関する交渉が行われるようになったのは1970年代に入ってからである。1870年代から1970年代

半ばまでインディアン学校では、数多くの生徒が中途退学者となっていた。その背景には、先住民の考え方を理解しない外部の人々（ユーロカナディアン）が管理・運営してきたことが要因として挙げられる。この認識が、後に先住民の教育自治権獲得運動に連動していく。

BC州北部に居住するニスガ（Nisga'a）の人々は、幼年期に隣のアルバータ州に強制的に移された経験を持っている。この強制収容は、先住民が参政権を得た1960年代以降も行われた。当時の子供たちは、同じ地域集団としてのアイデンティティを共有するのが困難であった。親元で生活することは、退学者を減らすだけでなく、子供たちに地域集団固有の言語や生活様式を伝えていくうえで不可欠であった。

数々の交渉が行われた後、1976年に、ニスガの人々はBC州の先住民として初めて居住する地域における教育の自主的管理と運営の権利（第92番学区／ニスガ）を獲得した。以降、1980年代に入り、BC州の各地で先住民の運営による学校が誕生したが、実際に最後のインディアン寄宿学校が閉校となったのは1986年のことである（Milloy, 1999）。

3 サーニッチにおける教育自治と先住民アート

サーニッチの人々による独自の学校（以下トライバル・スクール）建設も1970年代に始まったが、間もなくカナダ経済が下降する。1980年代入り、学校建設用の資金が大幅に減額された。そこで、少しでも建設費を節約する目的で、サーニッチの人々は、自らの手で建築道具を用いて学校建設作業に参加するようになった。この手作りの学校建設の際、サーニッチのアーティストのチャールズ・エリオット（Charles Elliott／以下C. エリオット）は先住民のアートの基本的な技術を若者たちに教えることになる。サーニッチが属するコースト・セイリッシュの彫刻の技術を教え、自らがデザインしたトーテム・ポールをサーニッチの若者達に彫刻させ、伝統的デザインを校舎の壁面に描き、若者たちに色を塗らせた。

C. エリオットは、現在70歳代で、コースト・セイリッシュのトーテム・ポールの製作者としてBC州全土にその名が知られている。筆者が始めて彼に会った頃は、まだ彼が貧しい時代だった。彼はコースト・セイリッシュのアート表現形式を、博物館に残されている古いコースト・セイリッシュの彫刻をすべて模写することによって独学で学んでいた。修行時代、毎日、彫刻刀と木片を持って博物館に通ったと彼は語る。当時の博物館は、今よりもずっと自由な行動が許されたという。C. エリオットは、博物館に保存されていた祖先たちの作品を模写し、その技術と表現方法を独力で学び取った。そして現在まで、一貫してコースト・セイリッシュの彫刻の復活に全力で取り組んできたのである。

C. エリオットはトライバル・スクールの壁面にある伝説上の鳥であるサンダーバード

(サーニッチの神話によれば「知恵」を象徴する) やワシ(「力」を象徴する) をデザインして、これを若者たちに色を塗る作業をさせた。彼は、この作業を通じ、自ら独力で学び取ったコースト・セイリッシュ独自の表現形式を若者たちに教えていったのである。彼は、自らのアートを教えることを通して、サーニッチの若者や子供たちに、地域集団の民族的アイデンティティを学ばせていった。トライバル・スクールが建設された以降、コースト・セイリッシュのアートは、C. エリオット から若者に「伝授」されていくものとなる。

1989年、文字どおり「サーニッチの人々の手作りの学校」サーニッチ・トライバル・スクールが完成する。学校創立当時からトライバル・スクールの大きな特徴は三点ある。第一は、「サーニッチのアート」を発信する場所として学校が存在していることである。校舎の前にサーニッチの集団として結束を意味するトーテム・ポールが立っている。それは、内部に向けては「地域集団」の結束を訴え、外部に向けては「祖先から伝えられたアート」が生き残っているという象徴的メッセージを発信している。校舎はコースト・セイリッシュのアートの展示場という性格も備えている。そして、第二には、「サーニッチの言語と世界観」を復活させる中心地として学校が存在していることである。授業では民族の「言語(センチョッセン SENĆOŦEN)と「神話」そして(祖先の様式とされ



写真1 C. エリオット がデザインして若者達に彫刻させた学校玄関前のトーテム・ポール (2004年筆者撮影)



写真2 C. エリオット がデザインして若者達が色を塗った学校玄関の上に描かれたサンダーバード (同)

る)「アート」や(祖先から伝えられたとされる)「音楽」,(祖先が作っていたとされる)「工芸」等の民族誌的「情報」が伝承される時間が設けられている。第三には、「サーニッチの祖先から伝えられた行動規範」を確認し、伝承する場所として学校が存在していることである。授業中、生徒達の授業態度が好ましくないと教師が感じたときには、授業を中断し、生徒達が「ストーリー」と呼ぶ「祖先たちのはなし」が英語訳で語られる。「ストーリー」は祖先から伝えられたとされる道徳や社会的規範に関する内容が主となっている。この話は一部のサーニッチによって口頭伝承されてきたものであり、その登場人物や物語がサーニッチ出身アーティストの作品のモチーフとなっている。これらの民族誌的「情報」を伝えてきた人々こそ、インディアン寄宿学校を脱走し、故郷の指定居留地に戻ってきた人々であった。

そのような長老たちが守ってきた民族誌的「情報」が今では教育科目として学校で教えられている。そのために、現在では学業成績の優秀な者が自らの言語を話すことができ、自らの集団独自の「生活様式」や神話などの知識も豊富に持っていることになる。以前、筆者がサーニッチの学校で会ったある小学生の少女は、自分の祖父母(センチョッセン)と自分の両親(英語)の間で簡単な通訳の役割が果たせるまでの語学力を身につけていた。(彼女は成長し、現在では新人のセンチョッセン教師となっている。)それに対し、生徒たちの親の世代の多くは、センチョッセンでの会話がほとんどできない。



写真3 授業中に「ストーリー」を語るセンチョッセン教師J(2004年 筆者撮影)



写真4 アートの時間に学んだコースト・セイリッシュのデザインの権を披露する生徒たち(2004年 筆者撮影)

この状況を打開すべく、長老たちが先生となって大人たちにセンチョッセンを教える夜間講座が、創立間もないころからトライバル・スクールで開講されてきた。

BC州政府はサーニッチ・トライバル・スクールに対して教育予算を増額した。2001年以降は、その増額された予算により、再びさまざまな教材の開発が可能となった。その結果として、徐々に、「センチョッセン講座」や「コースト・セイリッシュ・アート講座」の受講生も増加した。それに加え、センチョッセン学習を支援するためのホームページ作成の作業が始められた。さらに、2004年には、BC州経済が上昇したと同時に、子供たちのセンチョッセンへの向学心も上昇してきたように見える。同年には、長老たちによるセンチョッセンの発音を聴くことができるホームページも完成し、さらなる発展をつづけている。このように、サーニッチにおける言語とアートの再生は、BC州政府およびカナダ政府の経済的支援とも深い関係が見られる。

カリキュラムは、2008年2月の筆者の訪問時には大幅に変更されて、毎日、センチョッセンの授業が行われるようになっていた。同時に、「コースト・セイリッシュ・アート」の授業時間も増加していた。多くの生徒たちが、サーニッチの祖先の用いた様式のコースト・セイリッシュ・アートを学べるようになった。

1990年代の初頭、筆者が調査を始めた頃は、週3時間がセンチョッセンの必修科目で、2時間が選択科目であった。「アート」の授業は選択制であった。2008年には、授業の長さが30分のもので4回と45分が1回あり、いずれも自由に選択できるようになっていた。毎日センチョッセンの授業が各クラスで行われているためか、子供たちがセンチョッセンを話す頻度は、2011年度以降は、大幅に増加している。授業中の生徒たちの熱心さもかつてないほどであり、センチョッセンによる歌（太鼓を用いて「祖先の作った歌」を歌う場合と、教師が新しく作ったセンチョッセンの簡単な単語を用いた歌を歌う場合がある）やゲームなどの授業展開に工夫も見られ、楽しみながらセンチョッセンを学んでいる印象を強くした。

このような著しい変化は、2004年から2008年までの間にJを筆頭にセンチョッセン教師がさまざまな形での経済的支援を確保してきたことによってもたらされた。Jは“fund raising”と呼ばれる「資金を募る食事会」を年に数回開いている。そこには、アーティストとして経済的な成功を収めた先住民や「先住民アート」に興味を持つ有識層のユーロカナディアンも参加している。

2008年には、1990年代よりも科目数が増え、授業内容も整備されてきた。そのため、生徒たちは、1990年代後半の生徒達よりも熱心に参加しているように思われる。重要なことは、かつて否定された「先住民としての誇り」が教えられていることである。ヨーロッパ人によって植民地化される以前のサーニッチの生活がいかに「深い精神」を持っていたかが語られる。今やトライバル・スクールは民族誌的「情報」の伝承の場となっている。



写真5 2008年度 2年生のセンチョッセンの授業風景 (2008年筆者撮影)

2008年にはトライバル・スクールに「ハイスクール」が新設され、2011年の3月の時点で7年生から11年生までの46名が在籍している。近隣のユーロカナディアンのある学校では生徒数が激減していく中で、トライバル・スクールの生徒数はわずかながら増加している。そこで、近隣のユーロカナディアンの公立学校は、先住民の生徒を獲得するためにさまざまな工夫を凝らしている。それに対抗するためにも、トライバル・スクールでは、以前行われていた「伝統文化」という名の授業から「オープン・アート」という授業名に変更され、より自由度の高い授業が用意されている。

その授業の中で、生徒たちは自分がさまざまな種類の「アート」（それは、彫刻、絵画、「白人との接触以前」に行われたゲームやスポーツ用の道具、時には歌や踊りや、「祖先の行っていた漁法」のリーフネット〔岩礁網〕漁用の縄であることもある）から各自が選び、その「アート」を自らの進度に応じて制作していきながら、先住民の教員から指導を受けることができる。次節で述べる近隣のシドニー市にある水族館の完成により、サーニッチの子供たちに、先住民のアートが価値あるものだという意識が強化されてきており、「オープン・アート」は子供たちの最も好きな授業の一つとなっている。



写真6 ハイスクールのオープン・アートの授業風景1 (2011年 筆者撮影)



写真7 ハイスクールのオープン・アートの授業風景2 (同)



写真8 ハイスクールのオープン・アートの授業風景3 (同)



写真9 ハイスクールのオープン・アートの作品例。蝶を意味するセンチヨッセンが書かれている (同)



写真10 ハイスクールのオープン・アートの作品例 (いずれも 2011年 筆者撮影)



写真11 Shaw Ocean Discovery Centre 前の象徴的モニュメント (同)



写真12 センターのシンボルマーク (同)



写真13 センターの壁に描かれているコーストセイリッシュデザイン魚 (同)



写真14 土産用のトレーナーにもコーストセイリッシュデザイン
の魚の図が描かれている (同)



写真15 サーニッチの自然観を説明する図：新人のアーティスト作 (同)

4 コミュニティの象徴としての先住民「アート」

現在のサーニッチの社会的状況を考える上で最も重要なことは、ユーロカナディアン社会に先住民のアートが非常に高い価値を持って受け入れられているという事実である。例えば、1999年には、サーニッチの指定居留地の近くにあるスーパーマーケットの入り口に、前述のサーニッチ出身のアーティストC. エリオットの制作したトーテム・ポールが4本も建てられた。トーテム・ポール目当てに多くの客が集まり、店のオーナーは先住民アートの理解者として評判が上がるのである。さらに同じような背景から、レストランなどにもトーテム・ポールの建立が計画されている。2004年には、4本のトーテム・ポールがヴィクトリア市民センターの入り口に建てられた。また、新進気鋭のサーニッチのアーティスト、クリス・ポール (Chris Paul) の作品は、カナダ東部のあるデパートの包装紙のデザインに採用され、別の作品はアメリカのテレビ番組のセットとして採用されるほど北米全土の規模で注目されつつある。彼に倣い、さらに多くの若者が経済的な自立を願い、アーティストを目指している。

そのような若きアーティストの作品は、サーニッチの神話や前述の「伝統的行動規範の話」をモチーフとしていることが多い。街では、先住民に近づきトーテム・ポールの意味を熱心に尋ねるユーロカナディアンの買い物客や観光客の姿もよく見かけるようになった。ヴィクトリア市周辺の観光地や商業地域にトーテム・ポールが建てられるたびに、この民族誌的「情報」としての神話がサーニッチの人々にアイデンティティを確認させる働きをしている。サーニッチでは、このようなアート作品制作の技術的「情報」の伝わり方が、例えば先住民のアート振興のための学校を設立したオーストラリアのアボリジニのようにはまだシステム化されていない。そのため、個人が博物館や古いトーテム・ポールなどから自分で表現を学び、作品を作り上げ、それをユーロカナディアンのマーケットに出すという順路を個人の努力で形成していかなければならない。そのなかで評価が高ければ注文が増え、さまざまな場所やさまざまな表現手段で（例えば、前述のようにデパートの包装紙や観光パンフレットの中の挿絵などから州政府の出版物にいたるまで）作品発表の場が出現したのである。

さらに、2009年6月20日、ユーロカナディアンとサーニッチとの関係がアートを通じて新たな段階に達する。BC州バンクーバー島のシドニー市に Shaw Ocean Discovery Center (以下 SODC) という、新しい仕掛けのある水族館が開館したのである。この水族館の目的はバンクーバー島の自然と身近な海洋生物の解説をすることであるが、それと同時に、「新しい仕掛け」として、この地域の先住民の自然観や海洋生物に対する考え方も紹介している。それによってユーロカナディアンの科学的な説明を基本としながらも、先住民の自然観を尊重し学んでいこうという姿勢を打ち出している。それは、ユーロカナディアンの科学と先住民の「哲学」が共存することがバンクーバー島の地域的ア

アイデンティティであることを暗示している。

これは基本的にはヴィクトリアにあるロイヤルBC博物館 (Royal British Columbia Museum) と同じコンセプトを持っている。しかし、1990年代までの先住民アートとユーロカナディアン社会の関係と、2009年以降のSODCにおける先住民アートとユーロカナディアンとの関係には大きな違いがある。以前は先住民アートの作品は「エキゾチック」な「見せる対象」に留まっていた。BCロイヤル博物館の展示の仕方からもそれがうかがえる。そこでは、先住民の「生活」展示場所は照明を暗くして、解説のテープも過度にゆっくりと先住民の精神世界を語らせ、ユーロカナディアンの展示場所は照明を明るくして豊かで楽しい世界の雰囲気作りをしていた。これは、明らかに先住民の生活を隔離して「過去」に固定し、「地域」を媒介として、「現在」のユーロカナディアンの生活と無理やり一つの線で結びつけようという意図がある (渥美 1997)。ロイヤルBC博物館の展示の仕方は先住民アートを称えつつも、地域の「過去」のものとして、「過去」に無理やり位置づけている (渥美 1997) という点に政治的権力性を拭いきれない。

一方、SODCにはそのような一方的な権力性は感じられない。SODCがロイヤルBC博物館と異なるのは、現在の先住民のアート、それも多くの新人アーティストに制作の機会を与えている点とユーロカナディアンの「科学」と先住民の「世界観」が現在のこととして共存している点である。入口ではC. エリオットが制作したコースト・セイリッシュのデザインの魚群のモニュメントが人々を迎え、中に入るとセンターのシンボルマークがあり、これも彼のデザインである。壁にはサーニッチの「伝統的」デザインの海洋生物が描かれており、土産物にはコースト・セイリッシュ風デザインのマークがついたパーカーやトレーナーが並んでいる。

そこには、ユーロカナディアンの「科学」の説明の隣に、必ず先住民の海洋観が述べられている。SODCの内部や外部はサーニッチのアーティストたちの作品で埋め尽くされている。SODCでは、先住民社会の自然観や海洋に対する先住民の考え方を「学ぶ」ためのツールとしても先住民アートが存在している。SODCでは、ユーロカナディアンが描く科学的世界と先住民の世界観が共存することによって、未来に向けた地域的アイデンティティ形成の場となっているのである。もちろん、以前と同じように有名な先住民アーティストのデザインは観賞用としていたところに配置されているが、若手のアーティストたちの作品がサーニッチの伝統的な暦や海洋生物のセンチョッセン名を学ぶ教材の中に使われている。ここに新たな先住民の新人アーティスト登用の場が誕生しているわけである。

2011年の筆者の訪問時には、多くのユーロカナディアンの子供たちや観光客が、新人アーティストたちの描いた挿絵がならぶ、サーニッチの海洋観を説明するコーナーで熱心に学んでいた。今や先住民アートは、ユーロカナディアンが外から眺める作品ではなく、先住民の考え方の内側に入るためのツールとしても存在するようになった。そして、

その先住民の考え方の内側に入る経験は、観光という経済システムを通じて世界中の人々にその機会が与えられているのである。

SODCには、地元ユーロカナディアンの子供たちは勿論、外国からカナダを訪問し、BC州バンクーバー島にやってきた観光客が地元地域の様子を知るために訪れる。彼らに向かい入れるSODCには、サーニッチの新人アーティストの作品がサーニッチの世界観を説明するツールとして設置されている。その周囲を、先輩アーティストの洗練された作品がモニュメントや象徴的デザインや土産物のシンボルマークとして囲んでいる。この状況が意味するのは、ユーロカナディアン社会が先住民のアートの力を借りて地域の新たなアイデンティティを作り上げる状況が生じているということである。ここに、ユーロカナディアン社会と先住民アートの関係は新しい段階に入ったといえることができる。

5 おわりに

サーニッチの言葉に「ここを深く掘れ」（祖先の「生き方」を深く知れ）というものがある。足元を深く掘ると世界に通じるという意味だとサーニッチの長老が話してくれたことがある。しかしながら、彼らは長い同化教育の間に「あそこを浅く掘れ」（ユーロカナディアンの生活様式を見習え）と言われ続けてきたのである。

しかし、その間も祖先が伝えてきたとされる言語、神話、アートを受け継ごうという強い意志を持ったサーニッチの個人が必ず存在した。彼らが政府からの抑圧の中で伝えてきた民族誌的「情報」は、今やユーロカナディアン社会がその地域的アイデンティティを世界に向けて発信するために不可欠なものとなってきた。以前、それは、先住民のアートからフォルムを借りることに留まっていた。しかし、2009年に開館したSODCに見られるように、先住民社会の「ものの見方」を学ぶツールとして先住民アーティストが新たな作品を創造する機会が生じている。さらに、州外や国外からやってくる観光客に向けて、近隣のユーロカナディアン社会が、その地域的アイデンティティの象徴として、サーニッチのアートとその背景にあるサーニッチの世界観を援用する状況が生まれているのである。

先住民アートと地域的アイデンティティの関係から言えば、BC州にある博物館には先住民のアートを展示することによって「先住民の生活様式や世界観」を地元地域の「過去」に固定し、ユーロカナディアンも共有可能にする暗黙の意志が見て取れた。それは、「称えるべき先住民アート」を腕ずくで「過去」に追いやり、その「過去」を共有しようという戦略である。しかし、SODCでは、そのような権力性は影をひそめ、未来を見据えて「現在を先住民と共に生きる」という極めて楽天的な意識が底辺に流れている。その意識がどれ程深度を増し、先住民のアートとそれを生み出す先住民の実状への深い理

解につながっていくのであろうか。今後の課題として見守り続けたい。

注

- 1) 渥美 2008a 「はじめに」を参照。「文化」や「伝統」と呼んできた概念の再検討を行うため、人々に伝えられてきた知識を「情報」という語であらわす。

文 献

渥美一弥

- 1991 「虹を掲げた人々——ニシカ族の教育と神話の世界」『民族学研究』56(2): 209-218。
 1996 「『伝統文化』を『名乗る』こと——カナダ・サーニッチ族の神話、地名、人名の今日的意味について」『民族学研究』61(1): 105-125。
 1997 「復興される『過去』——スピリチュアルなイメージを媒介とした先民とユーロカナディアンの関係について」川田順造, 上村忠男編『文化の未来』pp.110-119, 東京: 未来社。
 2005(2011) 「文化とアイデンティティ」奥野克巳・花瀨馨也共編『文化人類学のレッスン』(増補版) pp.205-231, 東京: 学陽書房。
 2008a 「『資源』としての民族誌的『情報』カナダ・ブリティッシュ・コロンビア州先住民サーニッチの教育自治と『文化』復興」『立教アメリカン・スタディーズ』30: 37-76。
 2008b 「『伝統』継承の場としての学校——北西海岸先住民サーニッチの学校が意味するもの」『第23回特別展 環太平洋文化Ⅱ『トーテムの物語』——北西海岸インディアンのくらしと美』pp.26-29, 網走: 北海道北方民族博物館。

Haig-Brown, Celia

- 1988 *Resistance and Renewal: Surviving the Indian Residential School*. Vancouver, B.C.: Tillicum Library.

Manuel, George and Michael Posluns

- 1974 *The Fourth World: an Indian Reality*. Toronto: Collier-MacMillan.

Milloy, John S.

- 1999 *A National Crime: The Canadian Government and the Residential School System, 1879 to 1986*. Winnipeg: University of Manitoba Press.